

元老院と協同的であつたことを、多く當時の告訴事件を通じて述べ、第三章 *Tiberius and the Empire* に於てはティベリウスの屬州に對する政策を論じ、大體に於て彼がアウグスツスと同様に、境界の防禦、屬州民の平和を維持することとその政策の骨子とせることを詳述して居る。第七章 *the struggle for the succession* に於て *Sejanus* を中心として、後繼者争ひたる御家騒動を詳細に述べ、その子 *Drusus* の死後彼の心境の變化について述べ、第八章 *The close of the reign* に於て、セヤヌス没落以後、彼の政策が *despotism* に變じたことを多くの裁判事件に於ける彼の行動によつて論じて居る。著者は云々、*The principate of Augustus was dead and despotism stood forth undisguised. It is true that theory of the constitution remained the same and that the change was psychological rather than legal, but it was none the less real and significant.* 云々。

本書は、時として心理解剖の獨斷を含み、或は史料に則するの餘り、ゴシップ的な事實をも、他の歴史事實と

は無關係の姿に於て述べてゐる等の缺陷あれど、プリンチベートから帝政への過渡期として、ティベリウスの晩年の政策を *despotism* と觀する等、ローマ史研究者には興味を起さしめるものを多く含んでゐる。本書は尚 *The sources of Tacitus* 他數篇の附屬論文あり、ローマ史研究者には是非一讀をすゝめ得るものである。(本文、二二九頁、附屬論文一八一頁 Oxford University Press, 1931.)

〔井上〕

● *Das Mittelalter* (in Einzeldarstellungen)

“*Wissenschafts und Kultur*” Bd. III

Leipzig und Wien 1930

維納大學では、學者の公開講演 (*Volkstümliche Vorträge*) を催した後、それを *Wissenschaft und Kultur* と言ふ叢書の形で屢次出版してゐる。本書 *Das Mittelalter* は一九三〇年に此の叢書の第三卷として現れたものである。

獨逸史學の本據である伯林大學が、前世紀以來の傳統

の光を喪ひつゝあると言ふことが屢々話頭に上つてゐる。是に對して、從來問題とせられなかつた維納の歴史學の近來に於ける擡頭振りは眼覺しきものがあり、大戦後の歐洲史壇に鬱然一中心を形作りつゝあることは注目に價する。アルフォンヌ・ドブシユ(Alfons Dopsch)の *Karolingerzeit* 及び *Kulturentwicklung* の二著が中世初期の研究に基礎的な貢獻を寄與した他に、故マックス・ツボルシヤク(Max Dvořák)の *Kunstgeschichte als Geistesgeschichte* が近來の名著であると評せられて居るのである。伯林の老大家デートリック・シェーファー(Dietrich Schäfer)が引退したとき、ドブシユはその名譽ある椅子に聘せられたけれども、敢て維納に留つたのであると彼自らその自傳の中に語つて居る。

本書は中世史に關し、十三名の専門學者に分擔せしめて執筆せしめた講座風の讀物であるが、塙國第一流の學者を網羅して居る點と、題材の設け方及び扱ひ方に就いて、新しい關心を示してゐる點とに於いて、充分評價に價するものを有つてゐる。例へば歴史學教授のドブシユ

やヒルシユ(Hirsch)、スルビーク(Sulik)等の他に、哲學のアイブル(Eibl)、ローマンズ文學のウケンクラー(Winkler)、獨逸文學のクルックホーン(Kluckhohn)等を動員して、夫々、シヨラストイークや、ダンテ、騎士文化などの特殊問題を講ぜしめて居るが如きで、中世文化を極めて廣い方面に互つて理解せんとする努力が看取せられる。分擔の範圍は左の如くである。

- Das Mittelalter und wir Hirsch
- Die Scholastik Eibl
- Albertus Magnus und die Naturforschung
des Mittelalters Strunz
- Theophrastus Paracelsus und die
Lehre vom Leben..... Strunz
- Die romanische Kunst und ihr Werden...Szygowski
- Die Gotik Tietze
- Die Musik des Mittelalters..... Ficker
- Dante Winkler
- Die ritterliche Kultur in Deutschland..... Kluckhohn

Bürgertum und Städtewesen in deutschen

Mittelalter Brunner

Deutsche Heldendichtung Kralk

Das deutsche Recht Hugelmann

Der deutsche Staat des Mittelalters..... Dopsch

Bildung und Schulwesen im Mittelalter Sprunz

Mittelalter und Neuzeit..... Strik

右分擔表に於いて注目せられることは、史學の専門家は全執筆者の約四分の一を占むるに過ぎず、他は悉く文學、美術、哲學、法學等の専門家であることで、殊に宗教及び教會の問題が一も觸れられてゐないことは、從來の中世研究と對比して最も奇異の感を起さしめる。恐らく本書の編述方針は全體的に、中世文化の俗的方面に向けられて居ると見るべきであらう。本書の中に於いてヒルシユ教授も述べて居る如く、中世研究は、永き停滞期の後再び現代人の活潑なる關心の下に立ちつゝある。それは、古代史研究に於ける如き、史料方面よりの新刺激に資ふものではなくして、新しい世界觀の動きに由來する

ものであらう。中世に對する新なる理解が求められつゝある、而も大家の時代でない今日、一人の手によつて完全なる、眞に満足すべき中世史の書かれることは、何時のことであるか吾人は是を期待し得ないのである。されば本書の如き、種々の専門學者の協力的出版が、中世の種々なる断面を理解せしむるものとして、極めて時宜に適した興味ある試みとして歓迎せられるのである〔鈴木〕

● 朝鮮 小史 小田 省吾著

本書は朝鮮に在つて多年文教の中樞に參與せられ、今京城大學に於て朝鮮史講座の一を擔任される著者が、一般世人に朝鮮史の概念を會得せしめん爲に概説されたものである。従つて研究的敘述ではなくて専ら平易な行文により何人にも分り易く述べる事を主眼として著されたのであるから、特殊な部門に關して研究せんとする人士にとつては緊要な書とは云ひ得ぬかも知れないが、一通り古代朝鮮より現時迄に至る半島内の變遷、朝鮮の地理的情勢より有つ所の日、支との關係に對する概念を得